

2025年10月31日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2025年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2025年11月～2026年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、11月は「接岸傾向」、12月以降は概ね「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、11月に「かなり高め」～「はなはだ高め」となるが、12月以降は「平年並み」～「やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「平年並み」：約2年に1回程度の発生頻度
「やや」：約3年に1回程度の発生頻度
「かなり」：約7年に1回程度の発生頻度
「はなはだ」：約22年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ：東シナ海は沖合域は前年を上回り平年並みで、沿岸域は前年・平年並み。
日本海は前年・平年並み。
- (2) マサバ：東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を上回り、沿岸域は前年・平年並み。
日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (3) ゴマサバ：東シナ海は沖合域は前年並みで、平年を下回り、沿岸域は前年・平年並み。
- (4) マイワシ：東シナ海は前年並みで、平年を上回る。日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ：東シナ海は前年・平年並み。
- (6) カタクチイワシ：東シナ海は前年・平年を下回る。

※「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：漁況：浮魚資源部(長崎) 黒田、高橋

海況：海洋環境部(長崎) 奥西、種子田、井桁

電話：095-860-1600(長崎)、ファックス：095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

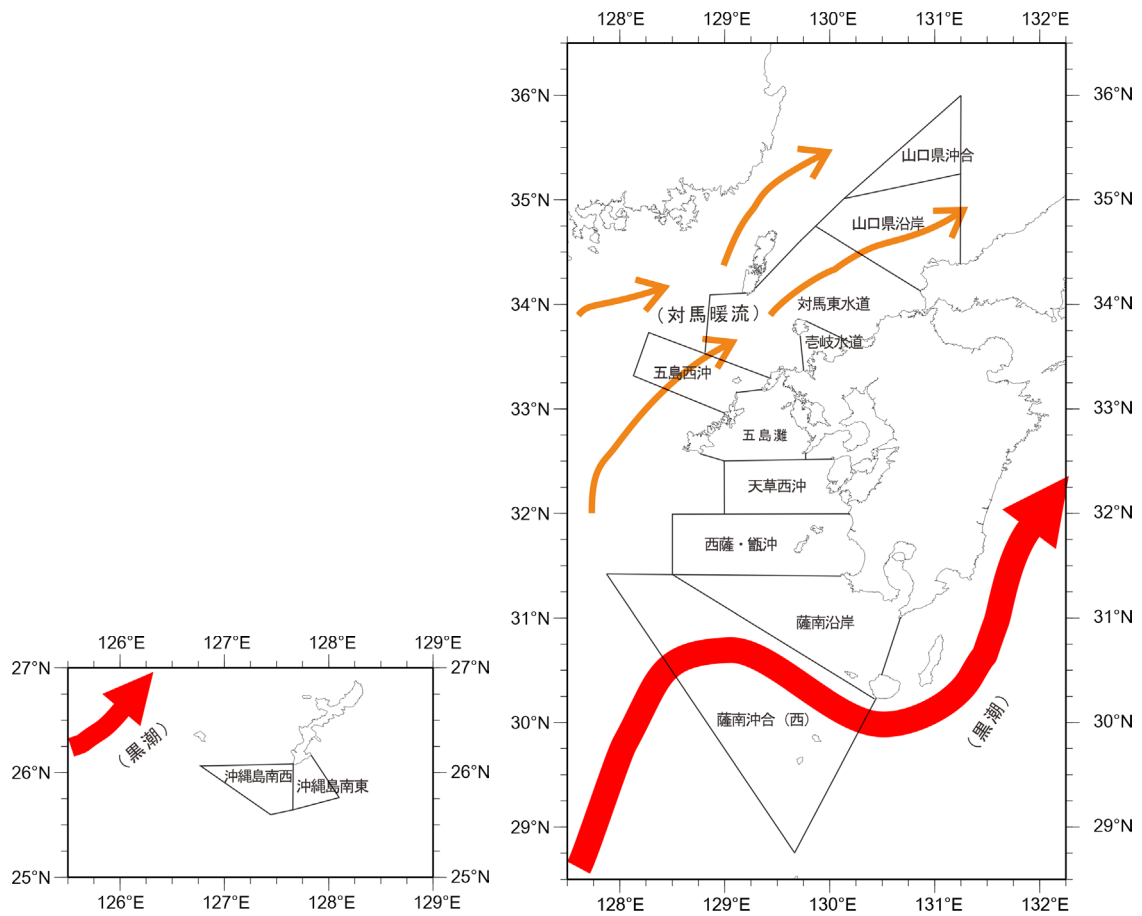


図1. 海況（沿岸）

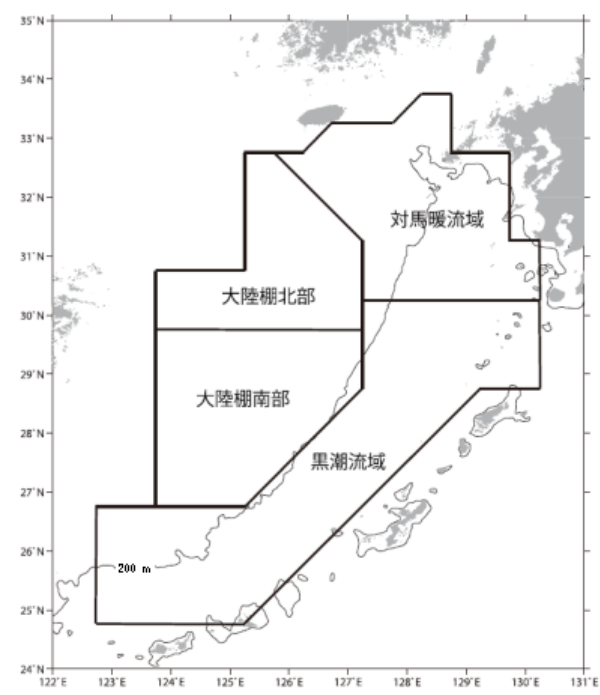


図2. 海況（沖合）

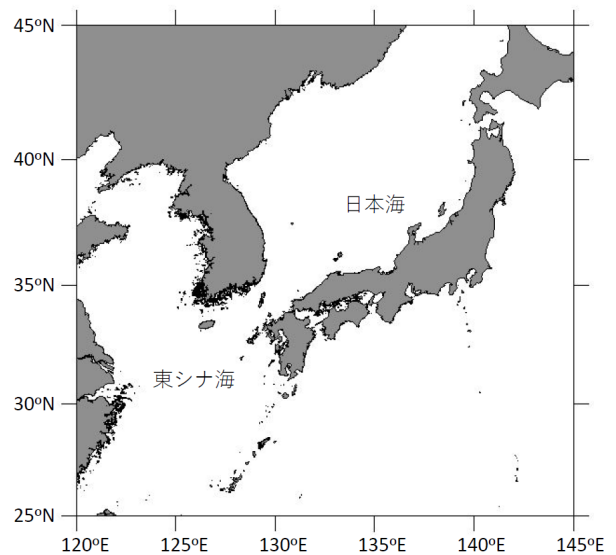


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、11月に「接岸傾向」、12月以降は、1月頃に一時的に離岸するものの、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚、黒潮流域で、11月は「かなり高め」～「はなはだ高め」となるが、12月以降は「平年並み」～「やや高め」で経過する。

2. 経過（2025年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「やや低め」、5月「平年並み」、6月～8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」。

南部：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「はなはだ高め」、7月「やや高め」、8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4月～8月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、9月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

4月「平年並み」、5月「かなり高め」、6月「はなはだ高め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7・8月「かなり高め」、9・10月「はなはだ高め」。

山口県沿岸：4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「はなはだ高め」、8月「やや高め」、9・10月「はなはだ高め」。

対馬東水道：4月「かなり低め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9・10月「はなはだ高め」。

壱岐水道：4月「やや低め」、5月「やや高め」、6月「かなり低め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9・10月「はなはだ高め」。

五島西沖：6月「やや低め」、8月「かなり高め」。

五島灘：4月「平年並み」、8月「かなり高め」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」、10月「はなはだ高め」。

西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

沖縄島南東：4月「やや低め」、6月「かなり高め」、7月「はなはだ高め」。

沖縄島南西：4月「かなり低め」、6月「平年並み」、7月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7月「かなり低め」、8月～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7月「はなはだ低め」、8月「やや高め」、9・10月「平年並み」。

対馬東水道 : 4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「やや高め」、
9・10月「平年並み」。
壱岐水道 : 4月～6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「やや高め」、9・10月「平年並み」。
五島西沖 : 6月「平年並み」、8月「やや高め」。
五島灘 : 4・8月「平年並み」。
天草西沖 : 4・5月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「やや高め」、10月「平年並み」。
西薩・甕沖 : 4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沿岸 : 4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「やや高め」。
薩南沖合 : 4・5・8月「平年並み」。
沖縄島南東 : 4月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「かなり低め」。
沖縄島南西 : 4月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「平年並み」。

3. 現況（2024年10月中旬）

1. 大陸棚上

海面水温は北部・南部「はなはだ高め」。

2. 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

（注）引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年を上回り平年並み、沿岸域は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：16～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、10～16cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980年代から1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2006年以降は30万から40万トンで推移し、2024年の資源量は37万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回り、2024年は7万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年4月～8月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中・南部、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1万6千トンで前年（2024年4月～8月、1万4千トン）、平年（過去5年の平均値、1万6千トン）並みであった。鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。漁獲の主体は20～25cmの2歳魚、12～20cmの1歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2023年級群の豊度は2022年級群を下回り、2024年級群の豊度は2023年級群を上回るとみられる。2025年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、新規加入量調査などから判断すると2024年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。各年級の豊度から全体の来遊量としては前年並みとみられる。沖合域では漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚は前年並み～上回ると考えられるため、沖合域では低調だった前年を上回り、平年並み。沿岸域では前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。近年は0歳魚の全体に占める割合が低く、1歳魚以上が主体となり、全体の漁獲量も低調である。全体の年級豊度が前年並みとみられることから、来遊量は前年・平年並みと考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで平年を上回り、沿岸域は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）に加えて、32cm以上の2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲される。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、60万トン前後に留まっている。近年は、2013年に46万トンまで減少したが、2014年以降、高い加入量に支えられて資源量は増加し、2023年の資源量は71万トンと推定されている（なお、2024年の資源量を推定する2025年度資源評価は、2025年12月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降8万～10万トンの水準であり、2024年は10万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年4月～8月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部、五島西と対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2.0万トンで前年（1.2万トン）、平年（1.0万トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は26～40cmの1歳魚以上で、5月以降は25cm以下の0歳魚がそれに加わった。

なお、一部の期間、長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は26～42cmの1歳魚以上で、7月以降は25cm以下の0歳魚が加わった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況から判断すると、2023年級群の豊度は2022年級群並みとみられる。また2024年秋から続く良い漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群を上回るとみられる。2025年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況から判断して、2024年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みから上回るとみられることから、来遊量は比較的多いと考えられる。沖合域は好調だった前年並みで平年を上回り、沿岸域は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）に加えて、2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲の対象となる。各年級の豊度から全体としては前年並みから上回るとみられ、また2025年4月～8月の漁況も好調であったことから、11月～3月期の来遊量は好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで平年を下回り、沿岸域は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、五島灘・薩南、対馬沖が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～40cmの0歳魚以上（豆銘柄以上）が主に漁獲される。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移していたが、2018年の22万トンから2019年に11万トンに急減した。2021年から再び増加し、2023年は18万トンと推定された（なお、2024年の資源量を推定する2025年度資源評価は、2025年12月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移していた。近年では2011年の5万トンをピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2020年は2万トンまで減少した。その後増加し、2024年は3万3千トンであった。

2. 漁況の経過

2024年4月～8月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と五島灘・薩南であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2.0万トンで前年（1.2万トン）、平年（1.0万トン）を上回った。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年を下回り、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は25cm以下の0歳魚と28～40cmの1歳魚以上であった。

なお、一部の期間、長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2023年級群の豊度は高かった2022年級群を下回り、2024年級群の豊度は2023年級群並みとみられる。2025年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況などから判断して、2024年級群並みとみられる。

例年、沖合域では11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲量の大半を占める0歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。沿岸域では0歳魚以上（豆銘柄以上）が漁獲の主体となる。沿岸域の来遊量は2025年4月以降の漁況から判断して、前年・平年並みと考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）、3歳魚（2022年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）主体に、18～23cmの1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部、後半に日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）に加えて、18～23cmの1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じ、2024年の資源量は175万トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年は100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2010年代には横ばい傾向にあったが、2019年以後急激に増加して2024年は14万4千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年4月～8月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表1）。海域別に見ると、熊本・長崎・山口県では前年並みで、平年を上回り、鹿児島県では前年を下回り、平年を上回った（表1）。漁獲の主体は漁期を通して15～22cmの1～3歳魚と15cm以下の0歳魚であった。

(2) 日本海

2025年4月～8月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。海域別に見ると、石川県～山形県までの日本海北部では前年・平年を上回り、日本海西部でも、漁獲の大半を占める鳥取県では前年並みで平年を上回った。なお、日本海西部では一部の期間、水揚げの規制があった。漁獲の主体は

前半は15～22cmの1～3歳魚、後半は15cm以下の0歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2023年級群の豊度は2022年級群よりも高く、2024年級群の豊度は2023年級群並みかそれよりも高いとみられる。2025年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、卵稚仔調査の産卵量推定値から判断すると、2024年級群並みかそれよりも高いとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に来遊する1～3歳魚の来遊量が漁況に大きな影響を与えている。漁獲の主体となる1～3歳魚（2022～2024年級群）の豊度が前年並みかそれ以上と考えられることから、東シナ海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に来遊する1～3歳魚の来遊量が漁況に大きな影響を与えている。漁獲の主体となる1～3歳魚（2022～2024年級群）の豊度が前年並みかそれ以上と考えられることから、日本海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））、1歳魚（2024年級群）、2歳魚（2023年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は、1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年には2万5千トンとなった。2004年以降は増加傾向を示し、2015年には14万トンに達した。その後は減少して2020年には6万3千トンとなったが、2021年以降は再び増加に転じ、2023年には13万2千トンとなった。2024年の資源量は9万5千トンと推定されている。

東シナ海・日本海における我が国のウルメイワシ漁獲量は、1976年から1998年にかけては毎年2万トンを超えていた。特に1980年代後半から1990年代前半には、4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年には1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向を示し、2013年および2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017～2019年の漁獲量は3万1千～3万9千トンの範囲で変動し、2020年には1万9千トンと大きく減少した。2021年以降は再び増加し、2023年には過去最高の6万1千トンを記録したが、2024年は4万3千トンであった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回り、平年を上回った（表1）。漁獲の主体は漁期を通して5～15cmの0歳魚および15～25cmの1・2歳魚であった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2025年4月～8月の漁況の経過、卵仔稚調査の産卵量推定値および資源評価結果から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群並みと考えられる。2025年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、漁況や中層トロール調査の結果などから判断すると、2024年級群並みと考えられる。したがって、東シナ海における来遊量は前年・平年並みと考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2025年11月～2026年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2025年級群（2025年生まれ））・1歳魚（2024年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2024年11月～2025年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年4月～8月）および見通し（2025年11月～2026年3月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1977年以降、2019年まで増減を繰り返しながら11万3千トン～42万6千トンで推移した。2020年以降は減少傾向にあったが、2024年に急減し、過去最低となる3万3千トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンとなった。2016年以降は減少傾向にあり、2024年には過去最低となる1万1千トンまで減少した。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は4月～6月に5～12cmの0・1歳魚、7～8月には8～10cmの0・1歳魚となった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となり、1歳魚（大羽銘柄）が混じる。卵稚仔調査の産卵量推定値や直近の漁況などから判断すると、2025年級の春季発生群の豊度は2024年級群並みもしくは下回ると考えられる。2025年級の秋季発生群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の不漁を考慮すれば、2024年級群並みもしくは下回ると考えられる。漁獲の主体となる2025年級の豊度が前年並みもしくは下回ることから、東シナ海における来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2025年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	主要4港のまき網 による漁獲量は2,048トンで、前年・平年を上回った（前年比183%、平年比207%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は403トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比270%、平年比34%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は3,106トンで、前年・平年並みであった（前年比98%、平年比99%）。
熊本 牛深港	漁獲量は31トンで、前年・平年を下回った（前年比48%、平年比51%）。	漁獲量は297トンで、前年・平年を下回った（前年比65%、平年比40%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は3,937トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比78%、平年比80%）。	TAC管理のための操業調整が行われ、中型まき網による漁獲量は8,736トンで、前年・平年を上回った（前年比153%、平年比181%）。	
佐賀	漁獲量は44トンで、前年・平年を下回った（前年比52%、平年比42%）。	漁獲量は63トンで、前年・平年を上回った（前年比170%、平年比417%）。	
福岡	中型まき網による漁獲量は188トンで、前年・平年を下回った（前年比48%、平年比57%）。漁獲のうち、ゼンゴ銘柄が52%、小銘柄が36%であった。小型定置網の漁獲量は0.5トンで、前年・平年を下回った（前年比15%、平年比10%）。	中型まき網による漁獲量は828トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比95%、平年比126%）。漁獲のうち、マメ銘柄が96%を占めた。	中型まき網による漁獲量は3.2トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比218%、平年比39%）。
山口	中型まき網による漁獲量は708トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比72%）。	中型まき網による漁獲量は1,722トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比100%、平年比136%）。	

注：「前年」は2024年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。鹿児島県のゴマサバの漁況経過にはマサバの記述も含む。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は3,450トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比65%、平年比209%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は345トンで、前年・平年を上回った（前年比137%、平年比213%）。	主要4港のまき網による漁獲量は1,195トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比107%、平年比157%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は253トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比147%、平年比51%）。	主要4港のまき網による漁獲量は37トンで、前年・平年を下回った（前年比10%、平年比7%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は79トンで、前年・平年を下回った（前年比78%、平年比42%）。
熊本 牛深港	漁獲量は2,823トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比83%、平年比242%）。	漁獲量は424トンで、前年・平年を下回った（前年比60%、平年比54%）。	漁獲量は216トンで、前年・平年を下回った（前年比57%、平年比16%）。
長崎	中型まき網による漁獲量は7,194トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比92%、平年比161%）。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は7,748トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比72%、平年比146%）。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は725トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比33%）。
佐賀	漁獲量は0.4トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比215%、平年比98%）。	漁獲はなかった。	漁獲量は2.5トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比144%、平年比79%）。
福岡	中型まき網による漁獲量は142トンで、前年・平年を上回った（前年比823%、平年比560%）。	中型まき網による漁獲量は33トンで、前年・平年を下回った（前年比66%、平年比53%）。	中型まき網での漁獲はなかった。
山口	中型まき網による漁獲量は65トンで、前年・平年を上回った（前年比366%、平年比543%）。湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は1,198トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比109%、平年比286%）。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は29トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比345%、平年比116%）。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は大羽主体に30トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比1367%、平年比12%）。

注：「前年」は2024年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

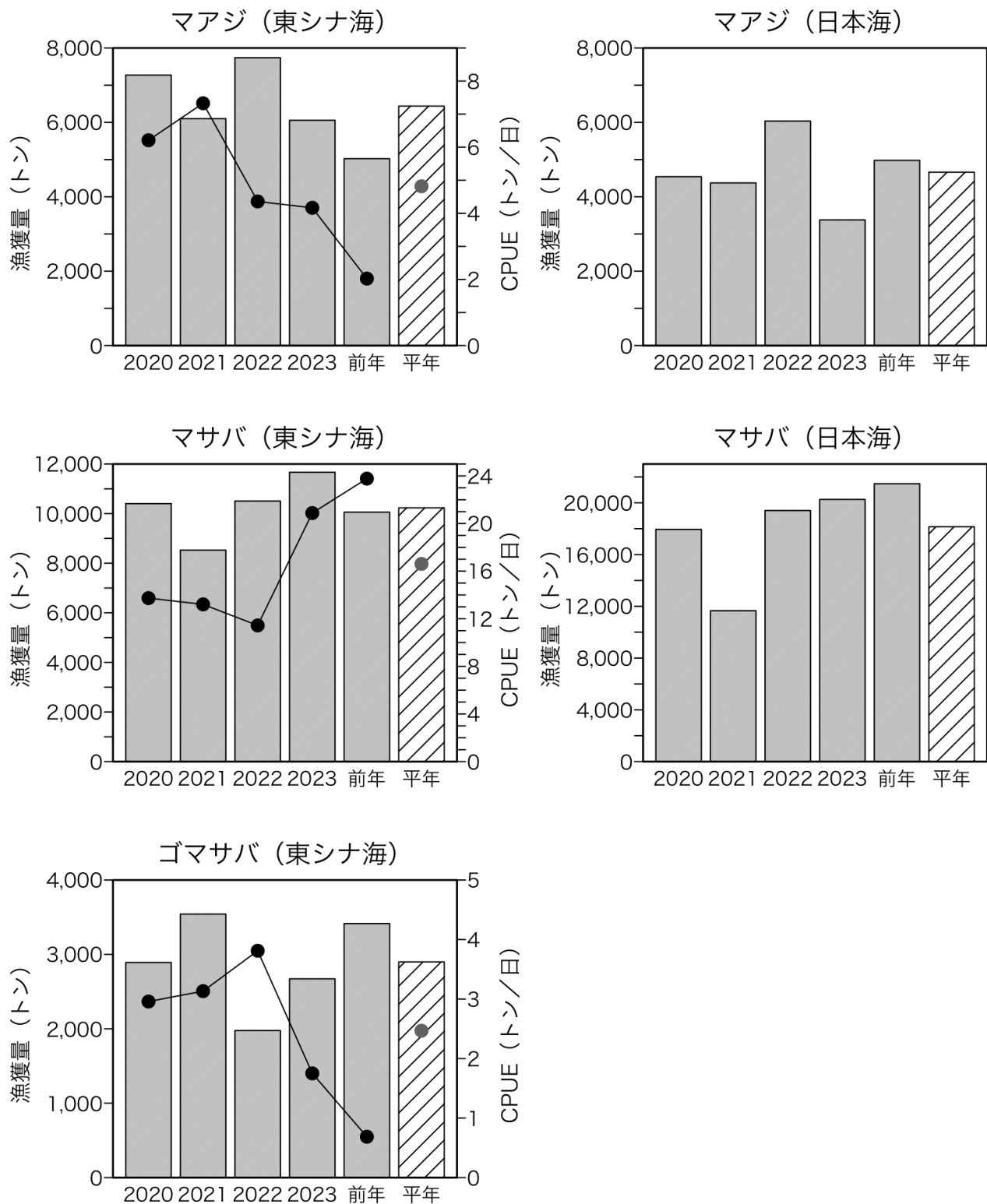
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2025年4月～8月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は203トンで、前年・平年を下回った（前年比64%、平年比37%）。	漁獲量は674トンで、前年・平年並みであった（前年比97%、平年比117%）。	漁獲量は99トンで、前年・平年を上回った（前年比193%、平年比393%）。
鳥取	漁獲量は1,518トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比32%）。	漁獲量は21,267トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比103%、平年比196%）。	漁獲量は26,500トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比118%、平年比145%）。
兵庫	漁獲量は50トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比79%、平年比84%）。	漁獲量は59トンで、前年・平年を上回った（前年比245%、平年比596%）。	漁獲量は11トンで、前年・平年を下回った（前年比11%、平年比43%）。
京都	漁獲量は244トンで、前年・平年並みであった（前年比104%、平年比98%）。	漁獲量は1,126トンで、前年・平年を上回った（前年比336%、平年比381%）。	漁獲量は219トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比70%、平年比155%）。
福井	漁獲量は97トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比38%）。	漁獲量は993トンで、前年・平年を上回った（前年比309%、平年比332%）。	漁獲量は19トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比169%、平年比79%）。
石川	漁獲量は541トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比126%、平年比76%）。	漁獲量は8,055トンで、前年・平年を上回った（前年比285%、平年比270%）。	漁獲量は7,812トンで、前年・平年を上回った（前年比517%、平年比126%）。
富山	漁獲量は177トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比94%、平年比49%）。	漁獲量は2,148トンで、前年・平年を上回った（前年比294%、平年比299%）。	漁獲量は1,521トンで、前年・平年を上回った（前年比185%、平年比170%）。
新潟	漁獲量は234トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比101%、平年比71%）。	漁獲量は704トンで、前年・平年を上回った（前年比450%、平年比521%）。	漁獲量は166トンで、前年・平年を上回った（前年比632%、平年比282%）。
山形	漁獲量は67トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比72%、平年比98%）。	漁獲量は12トンで、前年・平年を上回った（前年比199%、平年比132%）。	漁獲量は4.9トンで、前年・平年を上回った（前年比1,779%、平年比153%）。
秋田	漁獲量は202トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比84%、平年比69%）。	漁獲量は324トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比216%、平年比116%）。	漁獲量は2.9トンで、前年・平年を下回った（前年比5%、平年比5%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は45トンで、前年・平年を下回った（前年比68%、平年比75%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は118トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比91%、平年比53%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は1,417トンで、前年・平年並みであった（前年比86%、平年比93%）。

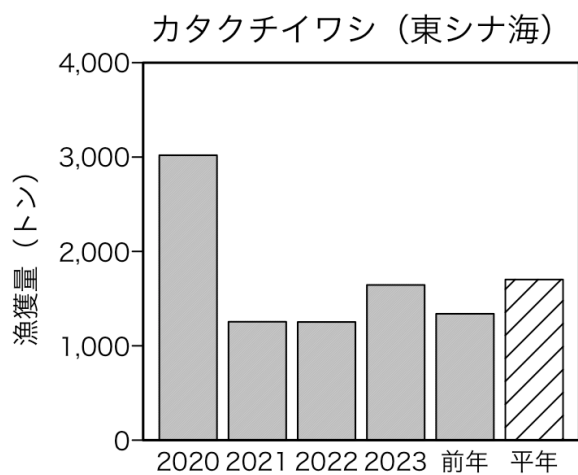
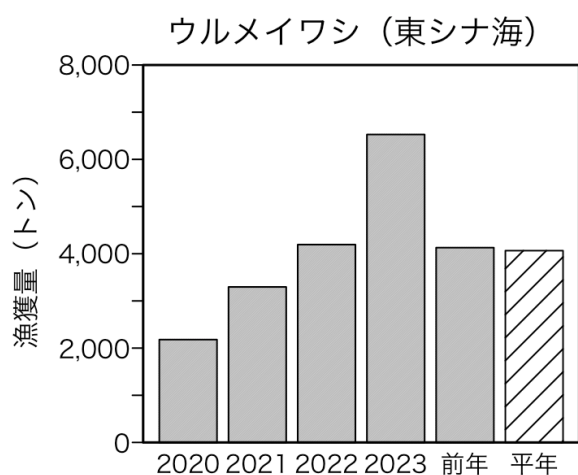
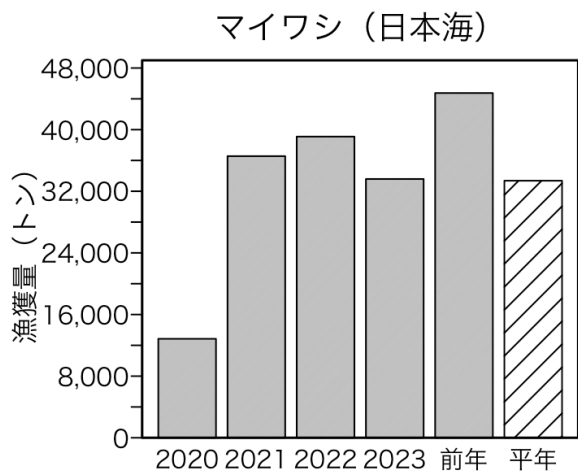
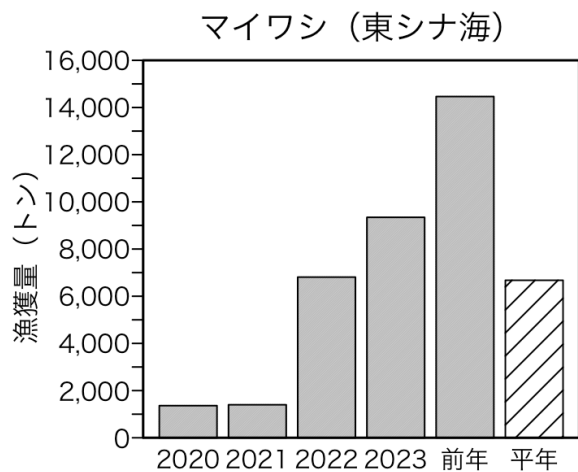
注：「前年」は2024年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図（マアジ、さば類）

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図（いわし類）

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所 秋田県水産振興センター 山形県水産研究所 新潟県水産海洋研究所 富山県農林水産総合技術センター 水産研究所 石川県水産総合センター 福井県水産試験場 京都府農林水産技術センター 海洋センター 兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	鳥取県水産試験場 島根県水産技術センター 山口県水産研究センター 福岡県水産海洋技術センター 佐賀県玄海水産振興センター 長崎県総合水産試験場 熊本県水産研究センター 鹿児島県水産技術開発センター 沖縄県水産海洋技術センター 一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
---	---